広報くろさき 5

黒埼町の今昔

第193回　執筆　宮田栄門

新聞からたどる黒埼の歴史（六十四）

大正から昭和の初めころ、権九郎ろんと高長ろん、治郎助ろんの三軒の網元が引き網漁をしていた。

（先月号からの続き）

産卵が近づいたメスは、川底の砂利に鼻先を突っ込んで、冬でも凍結しない湧き水の出ている場所を探します。産卵に適した場所が見つかると、上流に頭を向けて体を横に倒し、尾ひれを振り動かして砂利を跳ね飛ばすようにして産卵する穴（産卵床）を掘ります。この間オスはメスに付き添って外敵から守ったり、体を震わして産卵を促したりしますが、産卵床作りを手伝うことはありません。尾ひれで何回も産卵床の出来ばえを確かめながら、数時間をかけて直径一メートル、深さ三十センチ位の産卵床を作りあげると、メスは穴の中心に体を沈めて口を大きく開けます。続いてオスも穴の中に入り、口を開けながら放精します。僅かに遅れてメスが放卵しますが、この行動の時間は長くて十秒程度です。産卵が終わるとメスは産卵床の上流側の砂利を掘って受精卵の上を覆い、小高い山を作って外敵から守ります。通常この産卵行動を三から五日にわたり二、三回に分けて繰り返し、二千五百から三千粒の卵を産みつけます。産卵の終わったメスは受精卵を守るために産卵場所を離れず、時折、尾を使って受精卵に新鮮な水を送る行動を行いながら、稚魚の誕生を見届けないうちにその一生を終えていきます。

そして、たくさんの子孫を残して死んでいく親魚、それは、尊い使命を果たし終えた勇者の姿です。と結んでいます。

この資料は、平成八年六月、村上市の鮭の博物館いよぼや会館を訪ね、館長の岡村博さんからいただいたものです。

◎大野と鮭

昔、大野付近の川では鮭漁が盛んだった。大野の人たちは昔から、鮭のことをよおと呼び（これは村上のいよぼや会館のいよに通じるものがある）、そして、オスの鮭をメナといった。昔は十月の初めからえびす講（十一月二十日）ごろにかけて、大野の町裏（東側）の中ノ口川で鮭がたくさん捕れた。海から川に入って捕れる鮭を自鮭（じざけ）というが、新潟の信濃川の河口から二、三里位の大野辺りで捕れる鮭は、海で捕れた鮭よりずっと美味しいといわれ、値段も二、三割は高かった。

大野での鮭の漁獲は、①引き網漁、②いくり網漁、③流し網漁の三つの漁法で行われた。

①引き網漁

大正から昭和の初めころ、大野に権九郎ろん（新田町）、高長ろん（新田町）、治郎助ろん（新田町）と三軒の網元が引き網漁をしていた。この漁に使用された網は、今も浜辺で行われている地引き網の小型のもので、大体七区の大万さんの裏あたりが網引き場だった。漁法は、六人位が一組となり、まずともがけ（舟の一番うしろで櫂で舵をとるリーダー）が一人、打ち櫂（舟の漕ぎ手）が二人、足投げ（網に付いているおもりと一緒に網を川に投げ入れる）が一人、陸まわり（陸に居て網を引っぱっている）が二人であった。陸まわりを除いた四人が大舟に網を積んで乗り込むと、舟が勢いよく網場から押し出される。そして、打ち櫂の人が力一杯漕ぎだすと、「ギーッ、ギーッ」というわっさ櫂の音が川面に響き、それに合わせてともがけの元気なかけ声が飛び、見ていて気のすくような勇壮な作業がはじまる。続いて、川の中に投げ入れ易いように積んである引き網の足（おもり）を足投げの人が素早く川の中に投げ入れると、その足に引きずられるように網の葉（うき）が次々と連なって浮かんでいく。打ち櫂の人はわっさ櫂の音をきしませながら懸命に舟を漕ぎ進める。

注　わっさ櫂とは、稲藁の縄で輪を作り、それを船に取り付け、その輪に櫂を通してボートのオールを漕ぐ要領で漕ぐこと。

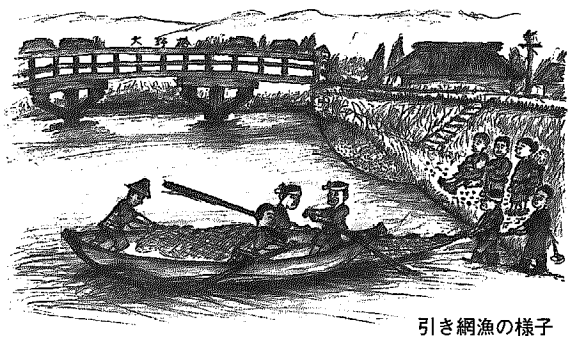
ともがけは、足投げに網を水中に入れさせながら舟が半円を描くように櫂で舵をとりながら陸に船を着ける。これで、網をまき終わり、全員、舟から降りて網の引き上げ作業にかかる。「やんぜぇー、やんぜぇー」と、そのかけ声がまた良かった。網がだんだんと陸に引き上げられてせばまると、網の中で水しぶきをあげて騒ぎ回っている鮭の姿が見えてくる。そして、次第に網の袋の中に追いこまれて捕らえられるのである。当時、町裏の引き網の漁場で、最盛期には一網に十四匹以上もの鮭が捕れたというが、次第に捕れなくなって漁場も大川（信濃川）の方に移り、何時のころからか無くなった。

注　引き網に使用された網は長さ約三十間位（約五十三メートル）で両方からたぐると、その真ん中あたりに袋がついていた。袋の長さは鮭がたくさん入るように三十尺位（九メートル）もある大きなものだった。また、網のおもりをあしというが、昔は今のように物が豊富になかったので、藁をよく叩いてその藁の中にこぶし大の石を一つ入れて、笹だんごのような形にして網に取り付けてあった。

②いくり網漁

いくり網漁をする人をいくりかきといった。いくり漁はおもにおく川（早生川の反対で、鮭捕りのシーズンオフに近いころの川）のころになってから行われた。

鮭は、産卵のために川を上るが、早生川の川水のまだ温かいころは、浅い所を通り、浅瀬のあたりで網にかかることが多く、おく川になると深場を選んで上るといわれている。それは、そのころ捕れる鮭の大半が網の下の部分にとまっていることが多いからである。（続く）



引き網漁の様子

平成十年五月一日発行（毎月一日発行）四一六号　発行／黒埼町役場　〒九五〇－二一九六　新潟県西蒲原郡黒埼町大野二八四三－一　電話／〇二五－三七七－三一〇一　編集／企画商工課（担当・広報統計係）　印刷／小野塚印刷㈱